

增長天王

吉川英治

青空文庫

山目付

こんな奥深い 峡 谷は、町から思うと寒い筈だが、案外冷たい風もなく、南勾配を選つて山歩きをしていると草萌頃のむしむしとする地息に、毛の根が痒くなる程な汗を覚える。

天明二年の春さきである。

木の芽の色、玲瓏な空、もえる陽炎、まことに春らしい山村の春。

肥前鍋島家の役人、山目付の鈴木杵之進という色の黒い侍、手に寒竹の杖をもち、日当たりのいい灌木の傾斜を、ノソリ、ガサリ、と歩いている。

「どうも、さっぱり面白くないな」

といわんばかりな顔つきで、恰好な場所を見つけると、ドツカリ山芝へ腰をおろしてしまった。

膝を抱えると杵之進、日向思案に落ちこんで、山目付とは、何たる御苦勞なしな役目だろうと、今さららしく、退屈の不平を数えた。

しかし、初めは城下詰の俗役をいとつて、われから望んだ役目なのだ。が、さて、やってみると、毎日、皿山からこの大川内の山一帯を、ガサリ、ノソリとあるいているだけの商売で、他国から御用窯の秘法を盗みにくる奴もなければ、品物を密売する悪人もない。みな佐賀のほこり、御用焼きの色鍋島を克明に制作している、善良なる細工人ばかりの山だ。

同時に、山目付の十手や大小も飾り物同様になつてあるくかがしに過ぎない訳にもなる。春の山に菌を求めているような役を、七、八年もやっていると武士らしい誇りや張合いはおろか、自分は人間だか兎であるかについて、ちよつと考えて見たくなる。

何か波瀾があればいい。

血の雨でも降るようなことが。

とまれ、余りにこの山は平和過ぎる。すぐ目の下の山間を眺め渡してみても、あつちの沢やこつちの山瀬に、四、五十戸の屋根が見えるが、それは皆、名陶色鍋島を焼く、御用細工人の陶器小屋で、人間がいるとは思えぬほど、イヤに寂莫とした景色である。

平和に飽くと平和な光景が、見るも気だるくなつてくるらしい。

それが、李之進をいよいよ憂鬱にさせて、何か、波瀾の来たらんことを祈りたくな

る。

「それを思うと久米一は偉いやつだ」

奎之進は、いつか久米一から聞いた怪気焰を思いだして、いささか屈託を慰めようとした。

「いったわえ、いつか、あいつが。だめだだめだ若い奴らは、五年もこの山に棲むとカサカサになつて寒巖枯骨のていたらくだ、陶土に脂も艶気もなくなつてくる。そんな野郎は茶人相手の柿右衛門の所へ行ツちまえ。おれの山から作りだす色鍋島は、煩惱もあり血も通つている、人間相手の陶器を焼くんだ！」と。なるほどそれは一理あるな。だが後の言葉はなお久米一らしかつた。べら棒め！と、こいつは、あの仁の癖で、——西

行とか芭蕉とかいう男みてえに、尾花や蒲公英にばかり野糞をしてフラフラ生きてい

るような人間になつて、ほんとの、生きた陶器が作れるかい。陶器つてえな冷やつこい物ばかりじゃねえぞ、恋女房の肌みてえに、暖かいものの筈なんだ？と。ははははは、無学の暴言かも知れないが、一家言として聞いてもいい、とにかくあいつは活々した人間らしいな、この奎之進に較べてみても」

立つと思う心もなく、フイとひとりでに立ち上がった。急に、久米一の細工邸へ、出

かけてみたくなつたのである。

そして、かんぼく灌木の枝を掻きわけながら、ザワザワと低地へ下りて行きかけたが、ひとみ何に眸を衝たれたのか、

「あ——」棒立ちに足をとめてしまった。

先の者も人の気配に、もくのしん空之進よりはびつくりした様子。雉子のめまおす雌雄が舞つたように、パラパラと沢の方へ逃げだした。

後ろ姿——どつちも美しい若人である。「罪なことをしたなア」

彼は、何だか余りいい気持がしなかつた。これは退屈のゆううつ憂鬱へ、少ししげき刺戟があり過ぎる。だが、こんなこともこの山にあつた方が喜ばしいと思つた。

「旦那、鈴木だんなの旦那」

その時、誰か後ろから呼びかけた声を聞いた。ふりかえ顧つてみると、久米一の細工邸にいるかまた窯焚きの百助ももすけという男。

「なんだ、お薪山まきやまか？——」

「いいえ、少し旦那のお耳に入れておきたいことがありますね」
ばかにき生まじめな顔をして、寄つてきた。

秘法盗

「今、あわてて逃げだした男女は、久米一の娘の棗さんと絵描座に仕事をしている、兆二郎という若造ですぜ」

と窯焚きの百助、いまましそうに鼻をこすつた。

「ああ絵描座の兆二郎か、年は若いが、だいぶ仕事の筋はいいそうではないか」

「そりや絵筆も巧者でしょうが、女にかけてもするどい野郎で、いつの間にか、師匠の娘とあの通り乳繰合っているんです」

「まあいいではないか、いずれ久米一も娘の棗に、婿をとらねばならぬ身だ」

「えー！」百助は不服なつらをおさえつけて、「そいつをとやこういうわけじゃありませんが、どうしてもお上へ訴えなけりやならねえことがあるんで、わっしは、そいつを旦那の手柄にさせてえと思ひましてね」

「訴える？ 何をだ」

「あの兆二郎という奴は、たしかに御用窯の秘法を盗みに来ている廻し者ですぜ」

「百助、まさか、いたずらごとを申すのではあるまいな」

「こんなことが嘘うそツ八ばちでいえるものですか。あいつはまだ十六、七の時、巡じゆんれい礼れいか何かに化ばけて、この山まきへ紛まぎれこんできた他国者たこくしやなんで、巧うまく久米一くまいいちの氣に入いって、絵描座えびさの細こ工人なに成なり澄すましたが、根ねからの巡礼じゆんれいで、ああ俄にわかに腕うでが上あがる筈はずはねえ、きつと金沢かねざわの九く谷たにかどこの廻まわし者もので、色鍋島いろなべしまの錦にしき付つけや釉うわぐすり薬すりの秘法ひぽうを盗ぬすみに来きたやつに相違さういありません」

「しかし百助、それだけの理由りゆうでは、兆二ちやうに郎らうを御法度破ごほつとりと見みなすわけに参まらんぞ」

「だから、これから師匠うぢの家うちまで、恐れ入おそれ入いりますが一緒いっしょに来ておくんない。あいつとわつしが対決たいけつして、きつと生なまじろ白しろい仮面かめんを引ひっぱいでお目めにかけましょう」

「では何か、そちが兆二ちやうに郎らうに泥どろをはかせるから、拙せつしや者ものに立会たつてくれというのか」

「親方おやぢの久米一くまいいちにも聞いていて貰もらいます。この山やまの鍋島焼なべじまやききは、二百年にほんねん来の秘ひみつ密みつ窯かまで、殿様たみさま初はつめ佐賀城さがじやうにつぐ宝たからだとしてゐるものだ。九谷くたにの者ものなぞに、窯築かまつきの法はふや薬くすり合せを盗ぬすまれて堪たまるものか。第一だいいち、そんな御法度破ごほつとりを出いせば親方おやぢも同罪どうざいだ、わつしや久米一くまいいちのためにも、ウントうんとここで肌はだを脱だがなきやなりません」

傲慢人

くろかみやま
黒髪山と谷川との間の狭い盆地に、陶工久米一の細工邸があつた。

おおかわち
大川内四十軒の、捻土方、窯焚き、下働きなどの締りをしている鍋島家御用工人、土塀囲いだが邸はかなり広い。

窯は盆地盆地に十数カ所、邸の裏山にも、一カ所ある。將軍家の献上品や佐賀城のお道具だけを焼くお止窯だ。普通、諸国へだすものは、今も久米一の邸の側の日向りに、まだ火も釉薬もかけぬ素泥の皿、向付、香炉、観音像などが生干しになつて乾し並べてあるそれだ。

しかし、これとて、その釉薬、築窯、火法、みな厳秘洩らすまじきものとなつて、洩らしたものは磔の掟である。

「御免——」

立派な武士が久米一の邸を訪れていた。

佐賀の城下から来た鍋島家の奥用人、刈屋頼母という侍。通されて奥へ入る。

奥では久米一、おそろしく華麗な部屋に、南蛮渡りの縞衣を着て、厚い衾の上に大

胡坐おあぐらをかいていた。

粉ふんたい黛よそおの粧こい凝こらした美女が、彼の瘤こぶのように厚い肩の肉を揉もんでいる。また一人の美女は久米一に煙草をつけて出し、また一人の美女が茶を運ぶ、それら脂粉しふんの香かと絢爛けんらんな調度ちようどにとりまかれていた陶工久米一は、左眼さがんのつぶれた目つかちで、かつ醜男ぶおとこで、肥こえてはいるが、年、六十から七十の間。

憎にくらしいほど、豊かくしやく鑠やくとしたものだ。

また人にも実に憎らしがられている。山の者はいうまでもなく、役人達まで、一人として彼を憎まざるものはない。久米一非常な傲慢ごうまんだからだ。誰にも屈くつしたことがない、誰へも傲倨ごうきよに君臨する、ましてや芸術においては無論、天下の陶器師を睥睨へいげいしている。

それでいて、城主を初め、役人や山の者までが、彼の前には、膝を屈くつしなければならなかった。たしかに、久米一は名陶工であつたには相違ない。色鍋島の絢爛けんらん艶美えんびな彫ちようた琢とくと若々しい光彩みなぎの漲みなぎつた名品めいひんが、この老いほうけた久米一の指から生れて、他の若い細工人さいくじんの手からは作り得なかつた。

京の仁清にんせい、色絵いろえの柿右衛門かきえもん、みな一派の特長がある。この山からだす色鍋島は、こう行くよりほかに道はないぞ、と彼はよく弟子の枯淡こたんになるのを叱りつける。

たいしゆひぜんのかみ
太守肥前守の使者、奥用人の刈屋頼母は、この尊傲な工匠の部屋へ通つた。

「おいでなさい」

といつただけで、久米一、別に上座も与えず、ただ肉の厚い膝を、いやいや直しただけである。

「相変らずお達者で祝着」

かえつて、城主の使者が世辞をいう。

「達者でござるよ。だが、もつと若くなるつもりだ」

「先日、殿からお贈り申し上げた朝鮮人参、どうでござります。召しあがりましたか」

「うむ、やつてみたよ、あいつはきくなあ」

「そのうちにまた、厦門船が入りましたら、お届け申すように取りはからいましょう」

「せいぜい、久米一のために、不老長寿の食い物を探してくんなさい。何しろ山には口くな物はねえからの。おれが老い込むと、色鍋島は亡びるぜ、つまりは、そつちの損にもなる」

「分つておりまする」使者の頼母は、さつきからムカムカしている我慢が、フツと顔に苦く出たので俯向いたが、ぴつたり、胸を張つて改まった。

「時に久米一殿」

「なんだな、殿様のお言伝か」

「左様。そのため俄に参じた次第。ほかではないが、折入つてのお頼み、一世一代のお氣組で、御用登りの窠にかかつては下さるまいか」

「はてな。御用窠にかかるのは、三年に一度の掟、去年、三彩獅子と牡丹絵の瑠璃花瓶を焼き上げて將軍家と御城内へ一つずつやつてある筈だが」

「さ、それについてでござる」

「氣に入らねえのか」

「滅相もないこと、三彩獅子を御覽ぜられて、將軍家の御感一通りでなく、殿、御上府のせつは、偉い面目をほどこしたそうでござる」

「なアにお前、將軍家なんぞに、この久米一の仕事に分つて堪るものか。ばかな、そりや大名の頭を撫でそやしておく、お世辞というものだ」

「いえ、決して世辞ではござりませぬで、御賞美の余り、もう一つ、黒木の御書院へ置く陶器をという御懇望、ほかならぬお方のおねだり、いやとは殿も仰せ兼ねます。久米一殿、頼母がかくの如く両手についてお願い申す、お家のためと思うて一つおかかり願いた

ら」

「ははあ、分った」

「えつ……?」

「そりや將軍家へ行くんじやあるまい。この久米一もそろそろ歳だ。いつぼけるか分らないから、このへんで、一生一品な物を作らしておこうという考えだろう」

「いや、まったく、左様なわけではござらぬ」

「隠しなさんな。よし、よし、おれも随分鍋島家には世話をやかせた、おれの傲慢に腹を立て、切腹した家来まであるからな。それにいくら久米一だって、そうそう若さも続くまい、一つこれを最後に何かやつて見よう」

「えつ、御承諾下さいますか……」畳を下がって礼をのべた。あたかも主君へ対する作法である。その上、夥しい金布の贈物を残して、刈屋頼母、大川内の峽から駕を戻して行つた。

「さあ、女ども、足を揉め、足を」

久米一はすぐにゴロリとなつて、前の若い女達を呼んだ。その女達は、伊万里赤絵町から、かわるがわる四、五人ずつ呼んでおく港の遊女で、朱塗の駕が山峽を通る日は、

飽いた女が返されて、次ぎのみめよい女が撰ばれてくる日だ。

窯焚きの百助と山目付の鈴木奎之進、庭木戸から入ってきてこの態を眺めたが、格別目新しいことでもないので、相変らずだな、と思つて縁へ寄つてきた。

「親方、ちよつと起きておくんさい。窯焚きの百助です」

「寝てやしねえ。なんだ？」と、久米一は横になつてゐる体を腹這いにして、擡げた首へ頬杖をついた。百助は癩に障つて、

「この老爺め、よくよく芸に慢心していやがる」

と思つた。陶器作りで一番大切なのは窯焚きなのだ、窯焚きの手加減一つで、どんな名工の鏤心砕骨も、ピンと破れが入つてしまふ。

だから、どんな雑物焼きでも、窯焚きの待遇にはハラハラするのが世間一般、久米一のように、腹ン這いで話すなんていう不作法は見たくも見られぬ例外だ。

「折入つて、親方にちつと話があるんですがね」

「いつてみねえな。よく今日は、折入つてという奴が続く日だ」

「鈴木のだ那」と後ろを向いて、

「一つわつしに代つて、さつきの一いち罇ちゆうを親方に打ちまけて見ておくんなさい」
 「よろしい」と山目付の空もくのしん之進、久米一の氣に障さわらぬように兆ちよう一郎じろうの嫌疑けんぎを話した。

恋燐火

絵描座えかきざと呼ぶのは、陶器絵かきの細工部屋さいくべや、奥の静かな一ひと間である。

さつき、そこへ戻つた菊田兆二郎は、何食わぬ風よそおを装まつて、香炉かうろか何かに鯉こい絵えの彩管さいかんをとつていた。

と、そこへ久米一の娘なつめの棗なつめが、少し色をかえて入つてきた。

「兆二さん」

「また来たのですか」

「嫌いやなの？」

「そうじゃありませんけれど、師匠の眼につきますからね」

「お父さんはいいのだよ。だけれど、困つたことが出来たようだ……あの窯焚かまたきの百助ももすけと鈴木さんが来て、何だかお前に来てくれというのだけれど」

「どこへです？」

「お父さんの部屋に。鈴木さんはいい方だけれど、あの百助のやつ、ほんとに嫌な奴だから、何をいいだすか知れないよ」

「いったら私もいつてやります。いつかお薪山へ、お嬢様を誘い込もうとしたことを」

「面の皮をむいてやった方がいい。だがね兆二や、向うで黙っていたら止した方がいいよ」
「ええそりゃいやしませんとも」こんな気持で、兆二郎は何気なく、縁伝いに師匠の部屋の前に来て板敷の上へ畏まった。

まだ前髪をとったばかり、青々とした月代に、髪油のうつりがいい。小刀を前差にして、袴の襷をとった形、いかにも棗の眼をひいたろうと思われる。

窯焚きの百助は、虫酸の走るような眼をくれて、いきなり側へ寄って行った。

「おい！ 加賀ツぼう！ 加賀の九谷から来た兆二郎ッ」

「えっ」

「見やがれ、面の色が変わりやがった。汝はなんだろう、大聖寺の前田の家来か九谷の陶器作りの伴だろう。うまく化け澄ましていやがるな」

「飛んでもないことを！ ……百助さん私は元江戸の者で、兄は浮世絵師の」

「止せよ！ この窯焚きの百助はな、さんざん江戸でもゴロついていた事があるんだ。てめえみてえな色の生なまじろ白しろい泥人形ねりなまが、江戸生れだなんて吐ぬかしたって誰がまともに受けるものか。その誑なまりは加賀ッぽう剥むきだした。前田の家来ちげに違ちがえねえッ」

「無む態たいなことをおつしやつて下さいませ。この兆二郎の身の上は、師匠もよく御存じでございます」

「やかましいッ。巡礼めぐりだか六部ろくぶだかになりやがって、仮病けびょうをつかつてこの邸やしきの前に倒れたなあぬの手段だ。そんなことはこの百助が、三年も前から睨にらみ貫としているんだぞ。さ、ここで泥を吐かなけりや、俺おれと一緒に代官所へ来い。白洲しろすで、白黒をつけてやる」

ムズと兆二郎の襟えりくび頸つかを掴んだ。

ずるずると廊下ひきずを引摺ひきずつて行こうとする。もの蔭かげにみていた棗なつめは唇くちべの色を失って顛くるえていた。

すると、煙管きせるを啜くわえて、今まで默然もくねんとしていた久米一が不意ふいに起たつて、百助の腰をドンと蹴く飛ばした。

「あっ」と、庭先ぶへ打たつ倒たおれた窯焚かまたきの百助。何か叫なぼうとしたけれども、ぬツくと、縁えり先に突つつ立たつた久米一の形ぎようそう相さうをみると、思おもわず骨身ほんみが竦すくんでしまった。

鈴木奎之進も、その血相には気をのまれた。よく山の者が久米一の傲慢増長を憎んで、かげ口に増長天王と悪口をいつているが、かりそめにも、この大川内で燹焚きの上手では右へ出る者のない百助を、足蹴にした憤怒慢心の今の姿は、まったく増長天王そのものの相であると思つた。

「た、短気なことをなされるな」

と奎之進、とにかく割つて入つたが、百助は嚇ツとなつて、久米一の顔を睨み上げた。

「やい、な、なんで俺を足蹴にしたツ」

「毒蛇といつてあきたらねえ人非人、足蹴ぐらいは易いこつたわ」

「人非人だと？ おい久米一、汝はどれほどな名人だか知らねえが、余り慢心して気まで変にならねえがいい。御法度を破つて、秘法を盗みに、他国から住み込んでゐる廻し者を、俺が見破つてやるのは、取りも直さず汝の落度を防いでやることになるんだ。恩とは思わねえで、人を蹴飛ばす法があるかツ」

「やかましいわいッ」

はつたと睨んで、久米一、そこに人なき如くこう言つた。

「おれの持つわざというものはな、自体こんな狭い山だけに、秘し隠しにされておしまいになるような小さな物ではないのだぞ。芸の術が大きければ大きいほど、世にも響こう世間にも溢れ出よう。それが当然の成行きだわえ！　だが兆二郎が加賀の廻し者だとは汝れだけの悪推量、娘の棗に懸想して、それが成らぬところから卑怯な作りごとをして、仇をしよう腹だろうが！　ば！　ばか者奴ツ」

「うーむ……」と百助、齒を食いしばって無念がったが、それは彼の毒心に、グサと入った。首の言葉である。こめかみから額に、蚯蚓のような青筋をみなぎらし、

「ちツ……畜生ツ、覚えていろ増長天王め！」

「なんだと」

「う、うぬの陶器は、今日ツかぎりこの百助が手にかけてねえからそう思えツ」

「勝手にさらせ」

「オオ久米一、手を切ツたぞ！」

眼に燐火を燃えさせたせて、真ツ蒼に怒った窯焚きの百助、捨てぜりふを残してまっしぐらに馳けだして行つた。

ろくろ情

峡谷たにあいの山村に、春が過ぎ夏が過ぎ、山そのものが色絵錦いろえにしきの陶器すえもののような秋になった。近ごろ陶工久米一とうこうくめいちの生活は、がらりと打って変ってしまった。

何人なんびとも覗かせぬ、細工場の陶戸すえどを閉めきつて、一生一品の製作に精進しょうじんしているのだ。

彼が、これを最後として作りにかかっているのは、窯焚かまたきの百助ももすけが、自分を罵ののしった言葉に着想を得た、増長天王ぞうちょうてんのう二尺余よの像である。

久米一は元より柿右衛門の神経質な作さくを嫌い、古伊万里こいまりの老成ぶったのはなおとらなかつた。で、この増長天王にあらん限りの華麗と熱と、若々しさと矜ほこりと、自分の精血せいけつを注そそごうとする意気をもつた。

深沈しんちんたる真夜中。

陶戸すえどの中の久米一は、素地そじを寄せて一心不乱に篋へらをとった。ミリ、ミリ、彼の骨が鳴つて、篋へらの先から血が滴したたりはしまいかと思われる。

轆轤ろくろにかかる彼の姿は、鬼のように壁へ映つた。そして、夜をつみ、日をついで、釉ゆうや

薬染付の順に仕事が進んだ。

ところが、人の寝しずまる頃になると、久米一は、物の怪に憑かれたように、仕事のひとりごとを洩らすのであった。

篋の秘伝、釉薬の合せ、彼が今日までおくびにも出さない秘密を、みなブツブツとひとりごとに説き明し、そして増長天王の仕上げにかかっていた。

不思議な——？　と思うと、またここに怪しいのは娘の棗の部屋。

夜ごと、一人の男が忍んでくる。

それが絵描座の兆二郎であることはいうまでもないが、その部屋へ入るとやがて、兆二郎の姿はどこかへ消えてしまう。そして、戸棚の上の天井板が黒い口を開くのである。

夜ごと、天井へはい上がった兆二郎は、屋根裏を伝うと、ソツと久米一の密室の上へかかり、そこに、苦心をして僅かに覗きうるだけの穴をあけた。

棗はその間、ほかの弟子が来ぬように見張っていた。兆二郎は天井の穴に目をつけて、息をのみながら久米一の仕事を凝視する。

と——やがての夜から久米一のひとりごとがはじまったのである。見ただけではわから

ぬわぎの謎、そこへくると説くのである。ああ、師匠は何もかも知っているのだ……色絵の秘法と同時に娘の褌をもゆるしてくれる心であったと兆二郎が、真つ黒な屋根裏で両手を合せたことも幾たびか。

輪廻篇

窯焚きの百助は、無論あのまま黙つてはいない。なお、執念深く、兆二郎の疑点をいくつも探り、佐賀の城下へ出て密告した。

ところが、鍋島家の役筋の方では、訴えられて非常に弱つた。殊に、刈屋頼母は極力それを揉み消し、百助と久米一との和解に努めた。

久米一の細工邸から、秘法盗みの罪人を出せば、その師匠の彼をも、同罪にしなればならない困難が一つ。

また、百助をここで怒らせてしまつては、無論久米一の御用窯には火を入れないと頑張るに違いない。ところが、久米一ほどの名人の火入れする窯焚きはそうザラにあるものでなく、大川内、伊万里、有田、三地を通じてみても、今度の献上陶器の火入れは、

どうしても百助でなければ納まりがつかない。

この困難が一つ。

そのいづれを欠いても、こんどの大事な製作ができないわけ、頼母が狼狽したのは無理ではなかった。

しかし、百助の方は、すべて莫大な金づくで我慢させた。

いやいやながら久米一に詫びを入れその日に、いよいよ焼くとなつた増長天王の像をうけ取つた。みると、さすがに倫を絶したでき栄である。いかなる遺恨も、憤怒も、久米一の芸術の前には、自ら頭を下げずにいられなかつた。

その受け渡しがすむと。

もう代官所の方では、すっかり手配ができていた。

「それっ」とばかり、久米一の細工邸へ、捕手の者を乱入させた。

何の苦もなく、久米一は直ちに縄を打たれてひきだされてきた。だが、その姿を一目見た役人や山の者は、一瞬に平常の彼にもつていた憎念を忘れて涙ぐんだ。

一心の芸術は、こうも人の精血を吸つてしまうものだろうか。僅かな間に、久米一の瘦せ衰えたことは非常なものであつた。糸を抜かれた蛾よりも婆娑とした姿に変わつて、大

言壯語も吐かず弱々と佐賀の城下へ曳かれて行つた。

しかし、久米一より大事な罪人、絵描座の兆二郎と、娘の棗の姿は、捕手が入つた時すでに、影も形も見えなくなつていた。無論、逃げたのは山越えとみて、山目付鈴木之進が手配したが、遂に、網の目にかからない。

夕月のかかる前から、黒髪山の山ふところ、御用窯に火が入つた、まつ黒な煙か、峽谷から押し揚つた。

そこに働いているのは窯焚きの百助。

彼は溜飲をさげて、得意に盈ちていた。

「ざまア見やがれ！」

ひとりで凱歌を奏していた。

しかし、彼の鬱憤は、久米一の細工屋敷が没落し、彼が城下で磔になるのを見ても、まだまだ腹が癒えなかつた。彼奴が死んでも殺されても、まだ生きているもののあるのを知っている。

何かといえ、久米一のわぎの魂。彼が色鍋島に残したかがやかしい名声だ。

「ようし……畜生」

百助は、その無形な名声をも殺す、恐ろしい一策を思いついた。

今、この御用窯の中には炎々たる高熱の火が入っている。そこには、久米一が、一世一代の製作、増長天王が彼奴の命を吹ツ込まれて、世に生れ出ようとする火灼の胎養をうけているのだ。

「こいつを、満足に火からだすのも、暗から暗にしてしまうのも、窯焚きのおれの火加減一つじゃねえか！ ウム！」と彼は思いついた悪智にうなずいて魔の笑いをもらした。

こうなると、百助の冴えた腕は、恐ろしい悪事の構成に利用される。彼は窯の中の陶器を、巧みに、火加減をもって悪作なものと変質させようとするのである。それも通常一般的な窯焚きが窯主に仇するような拙い手法でなく、後に誰が見ても、その製作が久米一の手落ちなためで、火入れの故意ではないように見せるべく苦心をした。

で、彼は、わざと変則な火入れをした。

夜に入り夜が更けると共に、太い火柱の影が、月の空へ突きとおって見えた。そしてすでに五更の暁に近いころ……。

今が大事な火加減のところである。

厚く築いた窯の土が、人間の血を日に透かして見るように赤く見えてきた。ここに窯焚

きの懸命が入れば、陶器の増長天王、焰の中から命をもって、世に出たもうことなるのだからが、百助は、元よりそれを呪っている。仇の胎児の死を眺めるような気持で冷然と、薪束の上に腰を下ろし、スパスパ煙草をくゆらし始めた。

たちまち窯の肌がドス黒く、火口の焰も弱って真つ暗になってきた。久米一生涯の神品も、今はどうなったか計られない。百助はそれを眺めてニタツ……と嘲笑った。

その時、不意に百助の後ろへ、黒い人影がソツと立った。

「おや？」

と、感づいて、ふり顧つた彼の真つ向！

颯然と、螢を砕いたような光が飛んだ。あツといった時は、それが剣であつたとみる眼も眩んで、窯焚きの百助、額を抑えて、ダツ——と跳びのき、満面朱になつて、

「うウ！……だ、誰だツ」

唇に流れこむ血を吹いて喚いた。

青白い剣の尖は、それに何の答えも与えず、なおスルスルと追い詰めてきた。百助は必死になつて、よろよろと逃げ廻つたが、また一人、飛鳥のごとく駆け寄つた影が、抱きすくめた彼の脇腹へグザと短剣の切ツ尖をえぐつた。

「おお、火が消える」

相手が斃たおれたと思うと、それには眼もくれないで、二人の影がかいがいしく窯かまの前に働はたらきだした。

お薪まきやま山から伐りだした松薪まつまきの山を崩して、それを掴つかむと、火口ひぐちを屹きつと覗いた若者。

「ええッ」

気合をかけてポーンと投げ込んだ。

「ええッ」とまたすぐに次の一本、また一本。今にも絶たえなんとしていた火の命いのち！ 甦よみがえつたかの如く赫々あかあかと燃え上がってあたりは光明昼のごとく真つ赤に照った。

百助ももすけを斃たおして、一心不乱に窯焚かまたきをしている若者二人の影、その時、ありありと姿が読よまれた。

絵描座えかきざの兆二郎ちようじろうと、久米一の娘なつめ、褌なつめであった。

絵師兆二郎は元よりただの細工人さいくになんではない。加賀大聖寺かがだいしようじの武人の血をうけ父は九谷陶くたにすえの窯元かまもとである。多少の呼吸も心得ている上に、今は恩人最後の大業を、命にかけても焼き上げようとする一念があった。焦熱しょうねつの懸命けんめいがあった。

窯かまは音をたてて最高度まで焔をあげ夜はほのぼのと明けかけて来た。紅蓮地獄くれんじごくにふさわ

うるしもみじ
しい漆紅葉の真つ赤なのが、峰から降り、窠の火ツ氣に煽られて、飜々と空に舞い迷う。

やがて海嘯のような声が揚つた。

山峡の細道を伝つて、夥しい捕手の数が黒髪山へ乱れ入つた。が、捕手の目は、御用窠の前に落葉に埋もれた百助の死骸を見出したのみで、棗の姿も兆二郎のかけも、遂にひねもすの山狩むなしく見ることができなかつた。

ただ、二人をあきらかに見送つていた者は。

やまめつけ
山目付の鈴木杵之進。

峰の頂、伊弉諾の尊の髪塚に立つて、程近き間道を手に手をとつて、国境へ逃げてゆくふたりの姿を認めたのである。

が、——しかし、杵之進、その時、その若人たちの前途に、明るき春あれ幸あれと、祈る心は湧いても、無慈悲な飛繩を飛ばそうとは、露ほども思わなかつたのである。

くめいち
久米一がいつた。いつか窠焚きの百助を蹴落した時に、「おれのわざはこんな山の中に封じられて終るような小さなものではないと。偉大なものは世の中へ溢れ出ずにはない」と。そうだ、ましてや杵之進の持つ弄具同様な十手や捕縄で、その溢れる力がせ

き切れるものか！ ……

しかし彼の心が、再びこの山村の平和に退屈しても、なお、これ以上の波瀾はらんを欲するかしら？ それは奎之進にも分らない。ただ当座は、一刻も早く陶器山すえものやまの静まるのを念じたに違いない。

× × ×

佐賀の城下で、陶工久米一とうこうくめいちが断罪となる日、彼の持窯もちがま——黒髪山くろかみやまの御用窯ごようがまも破壊された。破壊された中から生れた物があった。それは太守たいしゆも、刈屋頼母かりやたのもも、まつたく望みを絶つていた、増長天王ぞうちやうてんのうの陶器像すえものぞう。しかも一点の瑕きずなく彫琢ちやうたくの巧緻染付こうちそめつけの豪華絢麗ごうかけんれいなこと、大川内おおかわちの山、開いてこの方かた、かつて見ない色鍋島いろなべしまの神品。さらに、焼きの上がりも無類であつた。

鍋島肥前守なべしまひぜんのかみは、山役人から、その欣ばしい報よろこらせをうけると、直ちに、久米一助じよめ命いのちの急使を走らせた。

急使は刑場へ間に合つてついた。

だが、久米一の助命はかいなことであつた。なぜといえば、彼は、刑場へ来る途中、すでに、刀も待たず、枯木かれきの折れるように、死ぬともみえず老衰で死んでいた。

さて——話の結びに、彼の残した増長天王はどこへ安置されたか、それを一言する。天明四年正月早々。佐賀城から江戸へ向つて、警固荷役に守られて送り出されたのが、久米一作の増長天王であつた。届け先は、頼母が久米一に話した言葉と違つて、千代田の城へは入らずに、時の権勢家、田沼山城守意知の屋敷へ贈物とされることになつた。

これは鍋島家が、山城守に睨まれていたことがあつて、その機嫌をとり結ぶべく、心を砕いた賄賂であつた。賄賂といつては、久米一が作らぬだろうと、頼母に旨を含ませたのである。

ところが、増長天王を田沼山城の屋敷へ贈る手続きをしている間に、三月、江戸城朝会かいの当日、山城守は悪政の酬むくいをうけ、殿中で刺殺しきつされてしまった。

そのため、増長天王はしばらく江戸の上屋敷の秘庫ひこにあつたが、後に將軍家いえなり齊せいに懇望こんぼうされて、江戸城本丸に移された。しかし、それもやがてまた、幕府瓦解がかいの兆ちようをあらわした、安政六年の失火の時、本丸炎上の紅蓮ぐれんをあびて、遂に永遠の相そとを失い、もとの土に返つてしまった。

青空文庫情報

底本：「治郎吉格子 名作短編集（一）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2003（平成15）年4月25日第8刷発行

初出：「サンデー毎日 春季特別号」

1927（昭和2）年4月1日

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

増長天王

吉川英治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>